

アメリカの地で「日本人」として生きる力を育む

前ニュージャージー日本人学校 教諭

三重県津市立朝陽中学校 教諭 福路 浩章

キーワード 在外教育施設、柔道、アメリカ、異文化交流、自己肯定感

赴任校の概要（2025年3月31日現在）

ニュージャージー日本人学校

THE NEW JERSEY JAPANESESCHOOL

URL : <https://newjerseyjapaneseschool.org/>

1 はじめに

このたび、文部科学省の派遣により、アメリカの日本人学校において2年間勤務する機会をいただきました。限られた期間ではありましたが、日本の教育を軸にしつつ、現地の文化・社会に触れながら、多様な教育的活動を展開し、さまざまな気づきや学びを得ることができた。

2 日本のカリキュラムを基盤とした学びと成長

現地の日本人学校では、日本国内と同様に、学習指導要領に基づいた授業を行っている。授業内容や教材は基本的に日本と同じだが、児童生徒の多くが日英両語を使いこなし、異文化に日常的に接しているという点で、学習の進め方には柔軟さと工夫が求められた。

例えば、道徳や社会科の授業では、「日本らしさ」や「日本のよさ」とは何かを問う場面で、アメリカ社会との違いや共通点を題材にしながら、生徒たちが自分の意見を持ち、相手に伝える力を養えるよう意識して授業を構成した。こうした学びを通して、児童生徒は日本文化への理解を深めると同時に、自らのルーツや価値観について考え、自国への誇りや関心を高めていったように感じた。

3 異文化交流を通じた相互理解の深化

現地校との交流活動では、児童生徒たちが日本の伝統文化を紹介する機会を設けた。柔道・書道・折り紙といった体験型の活動を通じて、日本文化の魅力を伝えると同時に、異文化との違いを肌で感じることができた。交流は一方的な「紹介」で終わらせず、相互理解の機会となるよう工夫した。たとえば、事前に現地の生徒とメールでのやりとりを行い、当日は同じペアで再会することで、自然な会話や関係づくりができるよう配慮した。柔道体験では、「どう説明すれば伝わるのか」「安全に楽しんでもらうにはどうすればよいのか」といった課題に対して、生徒同士で相談し合いながら準備に取り組む姿が見られた。このような活動を通して、児童生徒は「異文化理解とは、単に違いを認めるだけでなく、相手に歩み寄り、伝え合うことだ」という大切な姿勢を身につけていくことが出来た。

4 柔道教室で見た“日本文化の根”の広がり

現地での柔道教室の見学・支援を通じて、改めて日本文化の奥深さと影響力を実感した。教室には約300名の生徒が在籍しており、その多くは日系以外のアメリカ人家庭の子どもたちでした。驚いたのは、彼らがただ技を学ぶだけでなく、「礼に始まり礼に終わる」柔道の精神を大切にし、日々の稽古に真剣に取り組んでいたことだ。指導者や保護者からは「日本の心を大切にしてほしい」「技術だけでなく、精神も学ばせたい」という強い思いが語られた。こうした姿を目の当たりにし、日本の文化が海を越えて、敬意をもって学ばれていますことへの感動とともに、自國の文化を改めて誇らしく感じる機会となった。子どもたちにも「自分たちが持っている文化には価値がある」という気づきが生まれていた。



5 社会学習としてのワシントンD.C.訪問

中等部の宿泊学習として実施したワシントンD.C.訪問では、政治や歴史をテーマとした学びを展開した。事前学習では、日本とアメリカの選挙制度や三権分立などの違いについて調べ、比較しながら学ぶことで「制度の背景には文化や価値観の違いがある」という視点を育てた。実際に現地を訪問し、博物館や議事堂を見学することで、生徒たちは教科書だけでは得られないリアルな理解と体験を得ることができた。こうした体験は、単なる知識習得にとどまらず「社会を支える仕組みの中で自分はどう関わっていくのか」を考える契機となったように感じている。



6 異文化環境で育まれる自己肯定感と主体性

海外にいることで、生徒たちは自分が「日本人である」という事実を常に意識することになる。文化や言語が異なる環境の中で生活することで、時に自信を失ったり、不安を抱えたりする場面もあるが、だからこそ「自分がどこから来たのか」「何を大切にしているのか」を考える機会が日常的に生まれる。

そうした中で、自分の文化を発信し、他者から関心をもたれ、評価されることで、子どもたちは「自分は自分でよいのだ」という感覚を育てていった。これは、アイデンティティの形成にとって非常に大きな意味を持つ経験であったと考えている。

7 おわりに

今回の派遣期間を通じて、私は「日本の教育が持つ力」と「異文化に触れることの価値」を深く実感した。現地での実践は決して一方的な“支援”ではなく、私自身が多くのこと学ばせていただく場でもあった。

帰国後は、今回得た学びを活かし、日本の子どもたちにも異文化に触れる機会を創出し、「世界とつながる感覚」や「多様性を受け入れる力」を育てる教育に取り組んでいきたいと考えている。また、海外で生活したことのない児童生徒にも、今回の経験をわかりやすく共有し「世界を知ること」「自国を見つめ直すこと」の大切さを伝えています。